

日本天文学会 早川幸男基金による
渡航報告書

— Imaging the Universe in Three Dimensions —

1999年3月29日から4月1日まで、アメリカ・カリフォルニア州・ウォルナットクリーク市において、表記の国際会議が行われました。日本からの参加者五人を含め、世界中から百人を超える研究者が集まりました。

この会議のタイトルにある"Three Dimensions"とは、空間2次元(天球面)+波長方向1次元の計3次元のデータを意味し、電波からX線の広い波長域にわたる観測装置の発表がありました。特に可視、近赤外ではこのようなデータを取得する観測手法を3次元分光と呼びますが、すばるを始めVLT・Geminiなど8m級の望遠鏡が次々と立ち上がりつつある現在、これらの望遠鏡に取り付ける3次元分光装置の話が非常に活発に行われていました。また、NGST(次世代宇宙望遠鏡)のセッションでは、複数のグループが様々な3次元分光装置の提案をしており、3次元分光観測が、これからの観測天文学において重要な役割を果たすだろうということが実感できました。

また、この研究会は、このような装置の話と、それらを用いてどのようなサイエンスを行うかという発表に同様の重きを置いているという点でユニークな国際会議で、その内容や発表者の顔ぶれを見てもこれらの観測手法に対する期待の大きさがわかりました。特に遠方の銀河の近赤外域での3次元分光観測は、VLT・Gemini・Keck等ほとんどの大望遠鏡で計画されており、どの望遠鏡が最初

に結果を出すのか競争になると考えられます。HSTによるイメージングやKeck望遠鏡による分光観測の次の段階として、3次元分光観測が計画されているというのは、話としてはありふれている分、逆に印象的でした。

私自身は、我々のグループの3次元分光器と岡山天体物理観測所の新カセグレン分光器を用いた観測の結果を、ポスター形式で発表しました。興味を持ってくれた人もいて話もしましたが、今回の渡航の最大の収穫は、上記のように観測装置・サイエンスの両面で見聞を広めることができた点だと思います。

会議の内容とは関係ありませんが、ノートパソコンとプロジェクターを使った発表が多かった事も印象に残りました。全体の3分の1くらいの人が使っていたと思います。なかには発表直前にOSが落ち、再起動している様子がスクリーンに流れているというようなハプニングもありましたが、インパクトの強い発表が多かったように思います。

今回の会議は私にとって非常に得るものが多い内容でした。

最後になってしまいましたが、このような機会を与えてくださった日本天文学会早川基金関係者の皆様に感謝致します。ありがとうございました。

服部 堯

(京都大学理学部宇宙物理学教室博士課程2年)